

徳川みらい学会第7回講演会

「浮世絵に描かれた徳川 JAPAN」

江戸時代の歴史に詳しく過ぎるタレント 堀口茉純氏



徳川みらい学会の第7回講演会を3月14日(土)静岡市民文化会館で開催しました。講師はお江戸ル(お江戸のアイドル)として注目を集めるタレント堀口茉純氏。浮世絵を通して、庶民によって育まれた徳川時代の文化について触れていただきました。

要旨は次のとおりです。

家康公が掲げた平和の時代

戦国時代に家康公が馬印で掲げた言葉は「厭離穢土欣求浄土(おんりえどごんぐじょうど)」でした。戦乱の世を終わらせ平和の時代をつくる事を、家康公は戦国時代に既に打ち出していたことがわかります。家康公が平和にかける思いは徹底しており、将軍家の後継者争いで国が傾くことが無いよう、尾張・紀州・水戸の徳川御三家に継承権を与えたといいたお家存続システムを築きました。

徳川時代の文化は庶民が担い手

貴族が中心の西洋文化と比べ、徳川時代の文化は庶民が中心となつてつくられました。例えば髪形では「虎御前」もしくは島田出身の遊女が結つたと言われる「島田髷」がまさに庶民から流行つた文化の一つです。

西洋画家に衝撃を与えた浮世絵

庶民の娯楽であった浮世絵は、ゴッホなど多くの西洋画家に「構図」「表現」「値段」という点で衝撃を与えました。見たものをそのまま描写する西洋画家と比べ、浮世絵師は日常の何気ない風景を印象的に捉えていて、構図や表現は斬新的なものでした。例えば歌川広重の「大はしあたけの夕立」。雨が黒



・歌川広重の「大はしあたけの夕立」

い線で表現されています。実際の雨を写実的に描こうとすると、無色透明のしずくとなります。

クールジャパンのルーツである浮世絵

また、浮世絵は大衆のために大量生産された版画であったため、とても低価格で購入できたことも驚きです。浮世絵は江戸独自の文化であり、全国から江戸に来た人が土産物として浮世絵を買っていたという紙媒体でした。最初の浮世絵師として知られ、美人画を得意とする菱川師宣は、男性比率が非常に高かった当時の江戸で、版画としての浮世絵を確立させました。



・菱川師宣の「見返り美人図」

現代でも「クールジャパン」といって日本のアニメや漫画は注目を浴び



ていますが、実はこの江戸文化として生まれた娯楽媒体が源泉となっているのです。

食文化の発達

浮世絵の他にも、男性比率が高い都市ということで発達したものに食文化があります。男性が勤務のため出先で昼食を済ますことも多く、ファストフードであるそばや天ぷら、寿司がよく食べられました。もともとそばはつゆにつけて食べていましたが、面倒だという人たちが始めたことでかけそばが出来るようになったのも、せっかちな江戸人氣質があつてこそです。

外交問題や、地震・台風といった災害、疫病などで大変な時期であった幕末においても、歌川広重はあえて浮世絵で天下泰平の世を描きつけました。これは大変な時代の中でも家康公の理念や平和への思いを受け継ぎ、文化の素晴らしさを伝えたいという気持ちの表れだと思います。

個人・法人会員を随時募集しています。皆さまのご入会をお待ちしております。

〈お問い合わせ〉 徳川みらい学会事務局 〈TEL〉 284-9660 〈H P〉 [徳川みらい学会](#) [検索](#)